

竹陵書言

「画は自由に新領域の開拓もできるが、書は一点一画ことごとく古法に則^{のっと}ってやらねばならぬのは馬鹿馬鹿しい。進歩の余地は無いではないか。」という声はよく聞くことですが、これは全く芸術の真意義を知らぬ人の言葉です。お能のごときも、その一挙手一投足、皆きっちり定まって寸分も馳^ち背^{はい}することを許しません。しかも、その深さは無限であり、その進歩には限りがありません。この点において書道は、お能と好一對の最も徹底した象徴芸術であります。

（丸山敏雄著『書道芸術』四十九頁
五十頁）

古法に則る

書道は、まず基本筆法を学ぶことから始まります。特に秋津書道会は、基本筆法を重視し、『秋津書道テキスト 入門解説篇』には懇切丁寧な解説が載っており必須のテキストです。

初心者の中には、基本筆法がなかなか進まないと感じる方もいるでしょう。しかし、ここが一番大事です。焦らず、じっくりと取り組むことが、結局は上達への近道となります。

一点一画ことごとく古法に則る。すなわち、型が定まっているということは、先人の切り開いた道を、倦まずたゆまず歩むことでもあります。その道を信じて進めば、必ず目指すところへ近づくことができます。こ

れは、とてもありがたいことです。

古法に則るためには、まず手本をよく見ることです。見えるようになった分だけ、己の書もまた深まっていきます。

「払い」一つとっても、限りなく深めてゆけるのですから、飽きるどころか、書道がますます楽しくなっていくます。

以前より手本の細部が見えるようになった、筆遣いが巧みになった――その小さな進歩こそ、大きな喜びです。書道は、そのような達成感を、私たちに次から次へと味わわせてくれます。

これからも、書道の汲めども尽きぬ喜びを、ますます深めていきましょう。